



Title	地域住民の外国人との交流・意識とその変化：群馬県大泉町を事例として：はしがき
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 22
Issue Date	2006-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/24472">https://hdl.handle.net/2115/24472</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_Hashigaki.pdf



## はしがき

1980年代以降、「ニューカマー」と呼ばれる多くの外国人労働者が来日した。「ニューカマー」が急増し始めた当初は、目的外就労、オーバーステイなどによる「非合法」の外国人就労が目についた。日本政府は「非合法」状態を一掃すると同時に、逼迫する労働需要に応えるため、1990年に入管法を改定し、日系人に活動制限のない特別な在留資格を与えた。その結果、1990年以降、日系人とりわけブラジル人が数多く来日することとなった。

ブラジル人は、東海地方、北関東などの自動車、電機等の製造業が盛んな地域に集住する傾向が強い。彼らは製造業の現場で単純労働に従事することが多く、企業にとってなくてはならない存在となった。

しかし、彼らは単なる労働力ではなく、生活者でもある。ホスト側の地域住民は、職場だけでなく、近隣、学校、商店街等、様々な場面でブラジル人と接触あるいは交流することになった。外国人との接触あるいは交流は、新たな社会関係を創出するきっかけになることもあるが、時には様々な葛藤や問題を生み出す機会にもなりうる。ブラジル人が集住する地域では、地域住民の外国人との接触あるいは交流が、いずれの方向に機能するのかが問われるようになっていく。

われわれは、このような状況をふまえて、1999年に日本でもっとも外国人比率の高い群馬県大泉町の有権者を対象にして、地域住民の外国人との接触・交流と外国人に対する意識に関する実態調査を行った。大泉町は町として積極的にブラジル人を受け入れ、外国人との共生に成功した町として知られるようになっていた。その実態を地域住民一人一人の生活や意識のレベルで探ろうとしたのである。その結果、大泉町では地域住民とブラジル人の棲み分けが進む一方、ゴミ出しを始めとして接触せざるをえない場面で様々なトラブルが生じ、町民の意識にもそれが反映するようになっていくことがわかった（詳しくは、小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会』御茶の水書房、2001年を参照）。

今回、改めて大泉町の有権者を対象にした同様の調査を実施する機会をえ、2005年8月に町民アンケート調査を行った。本報告書は、その結果をまとめたものである。今回の調査は、6年前の実態と比べ、どのような変化があったかという点に一つの重点を置きながら、現状と課題をより多面的にとらえることにも注意を払った。

本報告書が大泉町の人々が地域社会の現状と今後の方向性を考える上で、少しでも役に立てばと願っている。最後になったが、この場を借りて、調査に協力していただいた大泉町民の皆様には厚くお礼を申し上げます。

（付記）本報告書は、平成17～20年度の日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究A）（研究課題「外国人集住地域における地域社会構造と地域住民生活の変容に関する総合的研究」、研究代表者・小内透、課題番号17203032）にもとづく研究成果である。

北海道大学大学院教育学研究科  
小内 透